

横山ゆずり作 「進路」

<前編>

(効果音) (終業のチャイム)

先生 あー、それでは、その進路調査アンケートは、来週のホームルームの時までに、提出すること。以上。

(効果音) (教室のガヤ)

女子 あーあ、まだ1学期だっていうのに、もう進路調査かぁ。気が重いよね。

藤波加奈子 ほんと。イヤでも受験生だっていう実感わいちゃうよね。

女子 そうそう。加奈子はもう決めてんの、受ける学部とか？

加奈子 ううん、まだだけど。

女子 そっか。でも加奈子の場合さ、成績いいから学部だって選べるじゃん。あたしなんてさ、ヘタしたら短大だって危ないかもしれないんだから。「これじゃ何のために私立大の付属高校に行かせてるのか分かりゃしない」ってもう母に散々しかられちゃってさ。

加奈子 うちの親だってそうだよ。もう絶対、エスカレーター式に、すいすい上へ上がれるもんだと思ってるんだから。

女子 まあ確かに、他の受験生と比べたら楽かもしれないけどさぁ。

加奈子ナレーション わたし、藤波加奈子。青春大学付属高校の3年生。そろそろ進路について真剣に考えなくてはいけない時期なんだけど、でも来年の今ごろ、自分がどうなっているかなんて、全然イメージ浮かばなくて。一応、付属高校だから、友達ほとんどみんな内部進学を目指してる。わたしも去年まではそのつもりだったんだけど、実は今、ちょっとそのことで悩んでるんだ。

(効果音) (玄関のドアが開く音)

加奈子 ただいま。

母 あ、お帰り。加奈ちゃん、今日あなたに手紙来てたわよ。

加奈子 そう。...あ、北海道からだ。

母 ねえ、あなた、北海道に友達なんかいたっけ？

加奈子 え？ ううん、ちょっとね。ほら、2年の時修学旅行に行ったじゃない。その時にお世話になった人。

(効果音) (自分の部屋で手紙の封を切る音)

加奈子 えっと、「加奈子ちゃん、お元気ですか？ 先日はお便りありがとうございます。こちらはまだ...。」

ナレーション 手紙は、修学旅行で北海道に言った時にお世話になった、バスガイドのお姉さんからだった。初めて訪れた北海道の雄大な自然。そしてそこに生きる動物た

ちの姿は感動的だった。特に忘れられないのは、サラブレッドの競走馬を育てる牧場を見学したこと。小さいころ、お父さんに連れられて、競馬場で走る馬を見たことはあったけど、自然の中を伸び伸びと走り回る馬たちを見たのは初めて。「何てきれいなんだろう」って思った。それに、その牧場で働いている人たちも、生き生きとして見えた。思わず、「わたしもこういうところで暮らしたいなあ」って言ったら、バスガイドのお姉さんが、「本気でやりたいなら、知り合いの人がいるから紹介してあげる」と言ってくれたのだ。

加奈子モノローグ 「もしあなたが本当にこちらで働いてみたいと思うなら、一度夏休みにでも来てみませんか？ 牧場の生活を体験させてくれるそうです。」ほんと!? うわぁ やったー! えっと何々? 「ただし、相当厳しいですよ。来るなら覚悟しているじゃない。」か。そりゃそうだね。それは承知の上ですって。ほんとに行ってみたくないあ

ナレーション 実は、わたしが牧場生活を夢見るようになったのには、もう一つのきっかけがあったのだ。わたしは春休みごろから、クラスの友達に誘われて、近くのキリスト教会に通うようになっていた。礼拝でのお説教はまだ難しくて分からないところもあるけど、同じ年代の仲間が集まる高校生会は楽しみだった。

(音楽) (ゴスペルフォーク)

上原先輩 それでは、聖書の学びはここまでにして、交わりタイムに入ろうか、加奈子さん、この前、進路について悩んでるって言ってたよね。その後、どう?

加奈子 はあ、それが...

上原 よかったら、今のところの状況を話してみなよ。ほかにも高3のやつもいるしさ。

加奈子 実はわたし、正直言って自分が何をやっていいのかわからないんです。とりあえず大学行っとくのが無難だとは思っただけど、最近、何かそれにも疑問感じちゃって...

高校生1 分かる分かる。僕もそれはすごく迷ったもん。藤波さんと違って、僕は公立高校だから、受験勉強を本格的に始めなきゃって思ったのは、2年生になってすぐのころかな。その時、自分は大学に入って何がしたいんだろうって考えたら、何も浮かばないんだよね。それで、こんな目的もなしで進学するより、社会に出たほうがよっぽど勉強になるんじゃないかって思った。

上原 あのところは、その話で、よくみんな遅くまで言い合ったね。

高校生2 でも結局、今は受験勉強に励んでいるわけだね。

高校生1 そう、結局、受験生してる。

加奈子 どうして? やっぱ、おうちの人に反対とかされたの?

高校生1 ううん、そうじゃなくてね。その進路のことで祈ってて、みんなにも祈ってもらったり、アドバイスしてもらってるうちにね、気がついたんだ。自分の中に、「受験から逃げたい」という気持ちがあるんじゃないかって。口では「目的が見つから

ない」とかカッコいいこと言っても、本音は楽なほうに流れようとしてたのかもしれない。だから受験することに決めたの。大学行って、その4年間のうちに、自分の使命を見つけようって。

- 加奈子 へえ、すごい。そんなこと考えてる子、うちの学校にはいないんじゃないかな。
- 高校生 1 そんなことないよ。
- 高校生 2 でも確かに、この高校生会のメンバーは、結構マジに将来のこと考えてるよね？
- 高校生 1 うーん。やっぱり上原先輩の影響は大きいかも。
- 上原 おいおい、人のせいにするなよ。
- 高校生 2 尊敬してるんじゃないですか。みんな、先輩の後に続けて思ってるんですから。
- 加奈子 上原さんは今、医学部に行っていらっしゃるんですよね？
- 上原 うん。
- 加奈子 あの、やっぱりおうちはお医者さんなんですか？
- 上原 (笑う) 残念ながら、医者跡取りじゃないんだ。それに、将来も日本で開業医をするつもりもないしね。
- 加奈子 どういうことですか？
- 高校生 1 藤波さん、医療宣教師って分かる？
- 加奈子 イリョウ、センキョウシ？
- 高校生 1 そう。発展途上国に行つてね、医療活動に携わりながら、イエス様のことを伝える宣教師のこと。
- 加奈子 上原さん、その医療ナントカになるんですか？
- 上原 ああ、なりたいと思ってる。もともと医者っていうのは、子供のころからの夢だったんだけど、イエス様を信じてからは、一人でもたくさんの人に伝道したいと思うようになってね。その両方を一遍にやりたいって言うんだから、欲張りな話だけさ。
- 加奈子 へえ、すごい。何か立派すぎて、わたしにはまねできそうにもないけれど。
- 高校生 2 もちろん、みんなが上原先輩みたいになれるわけじゃないけど、先輩見ると、何か僕たちも、ボンヤリ生きてちゃいけないんじゃないかって思えてくるんだよね。
- ナレーション 教会の高校生たち、同じ年なのに、自分の生き方、あんなにまじめに考えてるなんて。わたしには、まだ「神様を信じる」とか、「祈って決める」とかいうことは、よく分からない。でも、彼らみたいに自覚的な生き方っていいな、と思えた。そんなある日。
- (効果音) (教室のガヤ)
- 先生 あー、藤波、進路調査の紙、どうした？ 提出してないのは、お前だけだぞ。放

課後、職員室に持ってきなさい。

加奈子

はい、すみません。

女子

加奈子、どうしたのよ。らしくないじゃん。忘れてたの？

加奈子

ううん、そうじゃないけど。何か迷っちゃって。

女子

バツカねえ。あんなの、適当に書いときゃいいのよ。加奈子ならさ、第 1 希望、文理学部、第 2 希望、社会学部ってとこじゃない？

加奈子

文理と社会じゃ、大分違うと思うけど…。

女子

だから、もうあんまり深く考えないの。就職のいい順に学部の希望出しとして、第 1 希望に通^{とお}ったら、ラッキーってもんよ。

加奈子

それじゃ、まるでいい会社に就職するために大学行くみたいじゃない。

女子

あら、違うの？ だってね、今時世の中不況なんだから、少しでも一流の企業に入って、エリートの男捕まえとかなきゃ。とにかく、加奈子はいちいち深く考えすぎんよ。もう少し割り切って大人になんなさいよ。

(効果音)

(加奈子が帰宅して玄関のドアを開ける音)

加奈子

ただいま。

母

あ、加奈子。さっき先生から電話があったわよ。あなた、進路調査の紙、まだ提出してないそうじゃないの。先生、困ってらしたわよ。どうなってるの、一体？ お母さんたちには何も言わないんだから。もし学部がまだ決められないのなら、せめて内部進学とだけでも書いて出すようにって、先生おっしゃってたわよ。職員会議で人数の報告の都合もあるそうだから。…ちょっと、加奈ちゃん、聞いてんの？

加奈子

…お母さん。

母

え？

加奈子

お母さん、あたし…。あたし、大学行かないかもしれない。

母

「大学行かないかもしれない」って、あなた…何言ってるの？

加奈子

ううん、あたし、大学は行かない。高校卒業したら、北海道に行く。北海道に行って、牧場で働くから。

(効果音)

(バタバタ階段を上がる音)

母

ちょっと加奈子、加奈子！ そんなことお母さんは許しませんからね。絶対に許しませんからね！

<後編>

加奈子

あたし、大学は行かない。高校卒業したら、北海道に行く。北海道に行って、牧場で働くから。

(効果音)

(バタバタ階段を上がる音)

母

そんなことお母さんは許しませんからね。絶対に許しませんからね！

(音楽)

(ブリッジ)

ナレーション

わたしは藤波加奈子。孝行3年生。学校は大学の付属なので、高3とはいえ、みんな割とのんびりしてる。人並みに勉強していれば、一応エスカレーター式に大学へは行けるのだから。わたしもつい最近まではそんな一人だった。でも今は違う。前からあこがれていた北海道の牧場、それが具体的な形となって頭の中に描かれているのだ。“わたしのやりたいことが見つかるかもしれない”、そんな期待が広がっていた。けれど、その気持ちを両親に理解してもらうのは簡単なことではなかった。

父

(階下から) 加奈子、加奈子！ ちょっと降りてきなさい。

ナレーション

帰宅して母に事情を聞いた父は、案の定、青くなって怒った。

父

どうしたことなんだ。もう一度お父さんに分かるように説明しなさい。どうして大学に行きたくないんだ？

加奈子

だから、それはもうお母さんに何度も言ったわ。このまま大学へ進んでも、あたし、適当に勉強して、適当に遊んで、適当に就職して、何となく決められたルールの上を流されていくだけのような気がするの。だから自分で選んだ。今じゃなきゃできないことをしてみたいの。

母

それなら、何も進学をあきらめなくても、大学へ行きながら、夏休みだけ北海道へ行けばいいじゃないの。

加奈子

そんなの、ただの旅行と同じじゃない。あたしはもっとちゃんと責任を持って働きたいの。だからお願い、3年間だけ北海道に行かせて！

父

働く厳しさも知らないで、何が“責任”だ。偉そうなことを言うな。大体、お前みたいな都会育ちの甘ったれに來られても、向こうだって迷惑なだけだ。

加奈子

迷惑にならないように、一生懸命やるわよ。これでもバレー部で鍛えたんですからね。根性だけはあるつもり。

母

加奈ちゃん、どうしてそんなつらいところへわざわざ行かなくちゃいけないの？ 女の子だから、大学受験で苦勞したらかわいそうだと思って、せっかく付属高に入れたっていうのに。

加奈子

苦勞だって必要なときもあるわ。

父

お父さんたちの若いころはな、学校へ行きたくても行けなかったんだ。だからお前には、教育だけはちゃんと受けさせてやろうと思っていたんだよ。今は分からないかもしれないが、いつかきっと、“お父さんたちの言うとおりにしておけばよかった”と後悔するに決まってるんだ。

加奈子

確かにお父さんの言うとおりがもしれない。でも今、牧場で働く夢をあきらめたら、あたし、そっちのほうが後悔すると思うの。もし何年かたって、やっぱり大学に行きたいって思ったら、それから受験勉強したっていいじゃない。そんな風に、一度社会に出てから勉強し直して大学に入った先輩だっているんだから。

父 先輩って、どこのだ？

加奈子 教会の人よ。

父 何？ さてはお前、教会でそんな考えを吹き込まれてきたな。そんなところ、もうやめてしまえ！

ナレーション 結局、両親には反対されたままで、話も聞いてもらえないまま、何日か過ぎたある日曜日の、高校生会でのことだった。

(音楽) (教会の賛美歌)

上原先輩 それで、加奈子さんはどうするつもりなんだい？

加奈子 もちろん、あきらめたりしません。前に頼んでいた人から連絡があって、女性スタッフを中心に競走馬を育てている牧場を紹介してもらったんです。夏休みに1か月、体験研修っていうの受けさせてもらえるんで、反対されても絶対行くつもりなんです、あたし。

上原 うーん。それはあんまり賛成できないなあ。

加奈子 どうしてですか？ あたし、上原さんや高校生会の人たちなら、きっと応援してくれると思ってたのに。だって、あたし、みんなを見てて、“自分もしっかり道を見つけなくちゃ”って思ったんですよ。それで、やっと、やりたいと思えること見つけたんです。それがどうしていけないんですか？

上原 君が自分のやりたいことを見つけたのはすばらしいことだよ。だけど、君は今、ご両親に反対されたことで、感情的になって突っ走ろうとしてないかな。

加奈子 それは…。

上原 僕も、自分が将来伝道者になりたいと思った時、すぐにでも学校をやめて、牧師先生に弟子入りでもしようかと本気で思ったことがある。だけど、神様の導きを求めて祈っているうちに、自分が本当に神様の役に立てる道は、医療宣教じゃないかって示されたんだ。そこに行き着くまで1年近くかかったよ。君も、もう一度、落ち着いて考えてごらん。そして、“どうしてもこれだ”っていう確信があるのなら、ご両親に分かってもらおうとする努力をあきらめちゃいけないよ。

ナレーション その日の上原さんの言葉は、わたしの心にズシンとこたえた。彼らと自分との、決定的な違いを見せつけられたような気がしたのだ。

加奈子モノローグ 上原さんは、ううん、クリスチャンのみんなは、思いつきや感情的な勢いで行動してるんじゃないんだ。いつも必ず神様に祈って道を選んでる。自分がやりたいからってことじゃなくて、どうしたら神様の役に立てるかって考えてたんだ。だから、あえて大変な道を選んでも、確信に満ちて歩いていけるんだ、きっと。でもわたしは？ 上原さんが言ったみたいに、思いつきで突っ走ってるだけ？ ううん、そうじゃない。わたしだって、この道がもし本物なら、頑張れるはず。

ナレーション 上原さんに“待った”をかけられたことで、わたしは冷静さを取り戻し、かえって粘り強く両親を説得することができた。わたしの根気に負けて、ついに父は、夏

休みの北海道雪を条件付きで許してくれたのだった。

父 言いか。これで牧場への就職を認めただけじゃないんだ。だから条件を付ける。

1学期の期末テストで、必ず推薦入学の基準をクリアできるような成績を取ること。それがダメなら、夏の北海道行きは取りやめだ。いいな？

加奈子 うん、分かった。あたし、頑張るから！

ナレーション それからわたしが奮起してテスト勉強に臨んだことは、言うまでもない。つらかったけれど、でも不思議と、今までに感じたことのない充実感を味わっていた。そのかいあって、無事、父の条件を突破し、念願の「北海道1か月牧場体験の旅」にやってきたのだった。

(効果音) (牛や馬の鳴き声)

加奈子 やった！ ついに来たんだ！ さあ1か月、頑張るわよ！ (大きな声で)よろしくお願いします！

スタッフたち (口々に)よろしくお願いします！

ナレーション 覚悟はしていたものの、ここでの生活は、予想を上回るキツさだった。起床は4時。身支度を整えて、4時半には馬の草の用意。2時間働いて、朝食のあとは、スタッフの人たちが馬を外に連れ出すので、その間にわたしたち新米は、フンの掃除、新しい干し草との交換などなど。もちろん、まだ馬には直接接触させてなんかもらえない。グズグズしてると、すぐにどなり声が飛ぶ。

スタッフ (大声で)そのバケツを向こうに運んだら、3人はスコップを持ってこっちに来て。あ！ ダメ！

加奈子 え？

スタッフ あなた、馬の後ろを回ってきちゃダメよ。最初の日に言ったでしょ。けられるよ！気をつけなさい！

加奈子 すいません。

スタッフ あ、ダメダメ、そんな力の入れ方じゃ。ほら、こうやって足に力を入れて持ち上げなきゃ。草を取り替える前に日が暮れちゃうぞ！

加奈子 あ、は、はい！

ナレーション とまあ、こんな具合でしかられどおしだったけれど、5日目ぐらいから、だんだん慣れてきたのが自分でも分かった。それに働いているスタッフたち、言葉はキツいし、ズバズバ言うけど、カラッとしてて、運動部の先輩みたいな感じなので、付き合いやすい。何よりも、この仕事にプライドを持って取り組んでいる、というのがすごく伝わってくる。驚いたことに、わたしと同じ年の人たちも数人、スタッフとして働いていた。

少女 A あんたも親に送り込まれたの？

加奈子 え？ いいえ、あたしの親は、実はここに来るのに反対してたんですけど、無理に説得して来ちゃったんです。

少年 A へえ、あんた変わってるね。おれたちは2人とも、高校の時ツツパって、悪いことばっかしてたんだよ。結局、退学になっちゃって、親が怒りまくって、こんなところに送り込んだってわけ。

少女 A でも、ここも慣れるといいとこだよね。時々、夜の街で仲間と遊びたくなることもあるけどさ。

少年 A うん。途中で逃げ出しちゃう子もいるんだよ。でも、あたしらは、3年っていう約束だから、それまでは絶対頑張るつもり。ハンパなことはしたくないんだ。

ナレーション 牧場での1か月は、あっと言う間に過ぎていった。自然や馬と触れ合う生活。生き生きとたくましく働くスタッフたちとの出会い。それに加えてもう一つ、貴重な体験ができた。牧場あてに、母から手紙が来たのだ。普段、一緒に生活していたら、あり得ないことだ。“やっぱり心配してくれているんだな”と思うと、なんか感謝の気持ちで一杯になった。

(効果音) (飛行機の離陸音)

ナレーション 生まれて初めて体験した一杯の思い出を胸に、わたしは東京行きの飛行機に乗った。

加奈子モノローグ 帰ったら、このことを教会の高校生会の人みんなに報告しよう。そしてまた、みんなと一緒に考えたり祈ったりしてもらおう。そして、この夏の体験を自分なりに整理して、はっきりと進むべき道を決めよう。うん、時間はまだあるんだもの。それでも迷って頭がこんがらがってきたら... そうだ、そのときはわたしも祈るんだ、神様に。

ナレーション そう思うと、何となく心の中がフワッと軽くなって、わたしは窓の外に目をやった。眼下には、あの緑の北海道が、どこまでも広がっていた。

(効果音) (飛行機の爆音、次第に遠ざかって。)

< 完 >